<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>神霊の道であるシャマンの身体</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>クネヒト・ペトロ</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>国際シンポジウム報告書 Ⅲ &quot;カラダ&quot;が語る人類文化  - 形質から文化まで - = 形質から文化まで = = 形質から文化まで = = 形質から文化まで = = 形質から文化まで</td>
</tr>
<tr>
<td>日時</td>
<td>2012-07-24</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>研究論文</td>
</tr>
<tr>
<td>資料権限</td>
<td>出版者</td>
</tr>
</tbody>
</table>
神霊の道であるシャマンの身体

クネヒト・ベトロ

本論文は中国の内モンゴル自治区呼倫貝爾（フルンプイイ）市の地域で行った現地調査で蒐集した資料の一部を元にしている。後に出展される議論を通じて評価してもらうために、差し当たって調査の状況を簡潔に述べることにする。調査地に居て、長期滞在の間シャマンの活動と彼らの生活環境を観察するのは理想的だが、これは様々な事情で不可能であった。代わりに2000年より10年間毎年の夏に平均して2週間現地に滞在して、モンゴル、エヴェンキとダフのシャマンたちを訪ね、聞き取りと儀礼観察による調査を行った。この間、10人くらいのシャマンに出会ったが、うちの3-4人と親しく付き合える機会を得た（クネヒト2004）。

この付き合いを可能にしたのは優秀なモンゴル人の通訳者である。中国語を初め、現地の諸言語に通じない筆者にとってどうしても通訳者が必要であった。彼はモンゴル人なので、モンゴル語は勿論、モンゴル人の慣習にも通じているので、現地の人々とよい信頼関係を築くことができた。その上、彼自身もシャマンたちに関心を持ち合わせていた。

シャマンたちは、僕からの例外を除いて、我々を快く受け入れ、多くの儀礼を観察することを許した。最近彼らの数が毎年増えるものみならず、諸活動が比較的公に行われている。それでも色々な制限が働いて、不安の影を落していることは見逃せない事実である。「シャマンのない時代」と言ってもいいうような状況を残した文化革命は現在まで風を引いている（クネヒト2010b）。その結果、シャマンたちは注意深く活動している。この事情が本論文の背景を成しているのを念頭に置かなければならない。

シャマンの身体を「神霊の道」と見做そうとする場合に、この概念は、シャマンになりシャマンとして活動する人物の体験において三つの連続的段階を見分けることができる。先ず、道になる前兆が現れる。次にそれを認めた人が現役のシャマンを師匠に選び成巫儀礼を受ける。最後に新しいシャマンとして活動する。これが三段階である。本論文で、この諸段階に沿って論を進めるとともに、必要に応じて「道」を物質的に示す手段的道具などにも言及する。

シャマン探しを始めようとした時に、海拉爾市（当時）政府の宗教局に会って、シャマンの有無についての情報を求めた。1人を除いて、現在シャマンは存在しないが、この人は力強いシャマンだという返事を得た。早速この人を訪ねることにした。シャマンを引退したばかりの中年の高齢の男の人であった。彼は幼い時からシャマンとその誦りなどに強い関心を持っていたので、自分もシャマンになりたいと願って、シャマンであった叔父についてシャマンに必要なことを教わった。シャマンの魅力に惹かれた彼は、シャマンの使命を ASM す原因不明の病の体験は必要でないと強調した。しかし、後に出会ったシャマンたちはこの主張を強く批判し、否定した。何故彼らに言わせると、このような病はシャマンになるのに欠かせない条件だからである。では、この病は誰も人にとって何を意味しているかを、H（男）シャマンの体験を基にして述べよう。

H はバルゴ・モンゴルの貧しい家庭に生まれ、幼い時親に死に別れた。彼は、12 才の時、ある日羊
を放牧した際、目の前に突然真っ暗になって倒れた。文化大革命最中の出来事だった。やがて北京まで行って、医者に診てもらい、その他にも数人の医者たちにかかったが、病は少しも治らなかった。この
状態は12年間も続いていた。病状が余りにも悪化して苦しいので、1990年に町の病院に入院したが、死
に及ばなかったとさえある。哀れと思った彼をHallarへ連れて行き、漢人の古い師に診てもらった。
この人の家に暫くの間泊まり、治療を受けた結果、幾らか恢復した。けれども、占い師は「あなた
の体にオンゴンが入ろうとしているので病気になっている。あなたは病気の人だ。治療することがで
きる人だ」と告げ、里へ帰って、神を拝むように勧めた（Erdemtu 2004、81）。さらに、どのようにし
てチャンになれるかをモンゴルの先生に教えてもらいたいとも言った。勧められたようにした彼は
かつてチャンであった人を見つけたが、この人は文化大革命中にチャンの道具を失って、もう活動
していなかった。けれども「私には何にもできない。あなたは自分の力で頑張って、チャンになるし
かしい」と指示した。

その頃、H氏の7才であった娘が突然家族の人々の前で踊り出し、皆を驚かせた。その説明を伺うと
して、漢人の古い師に訪ねたところ、「あなたはオンゴンを大事にしないので、オンゴンが娘の体に入っ
ている」と教えられた。この占い師は暫くの間H氏を指導し、オンゴンが彼に入るようにすること
に成功しなかった。その頃、本人も家族全員も相次いで病気になってしまった。困っていたH氏は今度
ウェンキのbariqaqという治療師に頼るようになった。この人もチャンではないが、「あなたはシャ
マンにならないと駄目だ」と言って、チャンのことを覚えている老人の知識を求め、彼らとともに
定期的に神の祭をすると指示した。H氏は余り真面目ではなかったが、2-3年続いて助言に従った
あげく、やっとチャンになるのを承諾した。それで1994年の旧暦9月に祭をした時にオンゴンが初めて
H氏に入った。その結果、彼の病が治った。それでも、彼の悩みはままだらなかった。チャンの
呪や踊り方などを知らないので多い不安感に陥った。そのことをオンゴンに対して訴えたら、オン
ゴンは「あなたではありません、私はあなたの体と口を使って、あなたの代わりに必要なことをやる」と教え
てくれた（Erdemtu 2004、83）。

やや長い話だが、この中にH氏がチャンになる過程の幾つかの特徴が現れている。文化大革命とそ
の後の厳しい社会事情によって、彼がチャンになる過程が完了するまでに数年も掛かった。このシ
チャンの候補者もH氏と同じ役の準備過程を通過しなければならないわけではない。しかし、この
過程の始まりは病因不明で、現行の医学的治療に負えない病であることは他のチャンたちも一般に認
めている。しかも、これがチャンになり、その使命が授けられようとする前兆であるとも理解し
ている。チャン候補者にとって、不安感に満ちて、使命の承諾と拒否の葛藤が繰り返される苦しみ過程で
ある。その目的は、H氏の訴えに対するオンゴンの答えで明らかになる。「あなたではない、私があなたの
体と口を使って、あなたの代わりに必要なことをやる。」そのためにオンゴンはチャンの身体に悪疫
し、それを祈願者に対して話したり、働きかけたりするための道を使う。従って、この苦しい過程の体
験を通じて、チャン候補者の身体はオンゴンがやがて祈願者に接するために利用できる道として作り
上げられ用意されている。

以上述べたHチャンが体験した大変長い準備過程をどのチャン候補者も同様に体験しなければ
ならない訳ではない。というのは、この過程に懸かる時間の長さが問題なのではなく、病因不明で、医
者が治せない特殊の病が切っ掛けで苦しい体験であることはその特徴である。これで、オンゴンは何時
でも出現できるように特定の人の身体を自分の道に掛けておく。Hチャンの場合には彼が置きされて
いた特殊な歴史的な事情との関係で、現役のチャンに弟子入りして、その元でチャンに必要な知識や技
能などを身に付ける機会がなかった。本人が正式にチャンになるまでにモンゴルの長老たちのアドヴ
ァイスを求めながら自分の力で頑張るしかないと言われた通り、自力でチャンになった。その証拠は
オンゴンによる最初の憑依の体験であった。しかし、当時の厳しい状況がある程度和らげてきた現在では、所謂「巫術」が相変わらずシャマンに成る使命の前出であるにも関わらず、病のこのような性質を認めめた上で、それを体験している人が現役のシャマンを巡り選んで、弟子入りすることが常例である。シャマンと生活を共にした、儀礼の時にシャマンを手伝うなどの方法で自らシャマンに必要な技能を見習う。これで自分を、精神と身体を含めて、オンゴンの道になるために準備しているのである。見習いのこの期間が長い短いかということは候補者の個人的事情によるが、1年ほど懸かるのが平均だとされている。この期間中にはオンゴンが見習いシャマンに憑依しないはずである。しかし、シャマンの弟子にオンゴンが入ろうとするケースもある。それが起こると歓迎されず、逆に厄介な迷惑と見做される。それは言っても、これはオンゴンが本人または誰かの身体を自らの道にしようとしている印である。

Hシャマンの幼い娘にオンゴンが憑いた例では、オンゴンは彼女を使って、本当は彼女の父親であるH氏にはいろうとしていたが、H氏がオンゴンが言うことを何時までも聞いてくれいないということを訴えているのである。つまり、オンゴンは自分が-mainにH氏に近い人である娘の魂の宿る身体を利用した。シャマンを手伝っている弟子たちなどにも同じようなハブニング的な出来事が起こり得る。Hシャマンが行ってきたオボ（敧恏）の祭の最後に起こったことだが、その時、儀礼に参加した独りの女性弟子がオンゴンに憑かれていた。儀礼が終わって、Hシャマンは自分のオンゴンを送り返した後にも、彼女に憑いていた霊がなかなか離れなかったのでHシャマンは明らかに大いに困り、様々な方法で彼女を解放してあげようとして、っとのところで霊を返すに成功した。

この弟子に起こったことに似ているような出来事は、昨年の夏Sシャマンが自分の昇格を目指した盛大な儀礼の最中にBという女性に起こった。B女性がもう10年ほど前にシャマンになるはずだったが、彼女の弱い反対のためにオンゴンにシャマンにならないことを許してくれるよう願って、シャマンになる儀礼の代わりにbariyaqという治療師になるための儀礼を上げてもらった。彼女は昇格したシャマンをよく手伝って、今回も飾り物などを作ったりして手を貸してくれた。昇格儀礼の最後の日だったが、彼女は見物した一般の人々の群集に交じって、シャマンの踊りを観察していた。彼女が手を合わさって、筆者のすぐ近くに立っていた。何かの予感があった、筆者が彼女を見たら、手が震えていた。震えが益々激しくなった途端に彼女は倒れ、叫び声を上げた。この状態に気づいて、シャマンの傍にいた手伝いの女性が駆けつけてきて、倒れたB氏を持ち上げて、椅子に腰かけさせた。そして、B氏の腹のところに帯をまわして、硬く縛めた。その後、B氏の胸と首などに白酒を吹きかけた。その間、B氏は緊張に歪まれた顔をして泣いたりしたが、助けてくれた人の手で次第に緊張が解け、B氏の顔に微笑みが浮かんできた。手伝いの女性の話しによると、B氏がシャマンになるはずなのでオンゴンが彼女の身体に入ろうとしたそうである。

Hシャマンの娘と彼の女性弟子、そして更にB氏の経験には共通点がある。一つは、いずれの場合にもオンゴンという霊が相手にした人の身体に乗って、それを選び別の形ではあるが利用した。憑依の形がそれぞれ違っているとしても、オンゴンが相手にしようとした人その人の身体を（Hシャマンの弟子とB女性の場合）襲うか、それとも相手と別人の身体を（娘の代わりにH氏のそれに）使いうとするところによって彼らの意志を伝えようとした。今一つは、いずれの場合にも、オンゴンは言葉でその意志を表さず、憑依状態を見た人がその意味を解釈してオンゴンの意図が憑依状態の原因だということを明らかにした。つまり、正式にシャマンになっていない人にオンゴンは憑依し、その身体を操作することがあったとしても、それは突然の出来事であり、オンゴンは無言のまま憑依する。ということは、ここでオンゴンは人を自分の身体を自分の道に使っているが、この道を最後まで、すなわち言葉を発するほどまでには使わない。この最後の段階はシャマン候補者がシャマンになる成儀儀礼の場で初めて実現する。
師匠のシャマンが自分の弟子のために成巫儀礼を指揮するのは理想で、常例であるが、候補者を育てた師匠はこの大切な儀礼を、より強力と評価されているシャマンに依頼して、執行してもらうこともある。一言で「成巫儀礼」と言っても、内蒙古で数回観察した成巫儀礼にはかなりのバリエーションが見受けられた。それは、幾つかの異なった原因によると考えられる。一つは、現在中国の政治事情で打ち切られているシャマンの伝統による。H氏シャマンの例が示しているように、彼には伝統によってこの大事な儀礼を行ってくれる師匠のシャマンがいなかった。しかし、現役のシャマンたちの内に彼の弟子で、彼に成巫儀礼をしてもらった人が何人かいる。そのために、彼が始めた儀礼の行い方はある程度現在のシャマンたちに応用されている。ある程度というのは、この方法は必ず守られなければならない方法ではないからである。儀礼を実際にどのように行うかは儀礼を指揮するシャマンの判断と思考によるところが少なくない。従って、1人のシャマンが何回も成巫儀礼を司るとしても、儀礼を受ける相手の事情を考慮したり、儀礼自体のより印象的な形を創造したりする。

成巫儀礼の形は如何なるものであっても、目的は何時も同じである。その目的はシャマン候補者のオンゴンが候補者の身体に入り、祈願者に対して告げを発すように招くことである。成巫儀礼が具体的にどのような儀礼であるかを示すために、2002年の夏にB氏というブリヤト・モンゴルの中年男性のために執行された儀礼のハイライトを紹介する。彼は草原の中出来た村で煉瓦造りの家屋を持って、住んでいた。儀礼のために屋敷の南側で、屋敷地の外でありながら境内に接するように新しいゲル（包）が建てられた。さらにまた、このゲルを中心に、儀礼で重要な役割を果すべきオガが東西の両側に並ぶ形で地面に差し込まれた。このゲルと木々は儀礼のクライマックスで重大な役割を果すので、まずこれらの物について述べよう。

成巫儀礼が行われる祭場は2か所に分かれていた。1か所は、シャマン候補者のオンゴンたちが祀られている祭壇が並んでいる家屋内の一室であり、もう1か所はゲルを中心とする屋外の場所である。夕方、犠牲にされた羊の首を切った肉がオンゴンたちの祭壇の前に拝まれ、供えられた時に、儀礼の第1部が始まった。その際、指揮するシャマンにオンゴンが感謝し、認識から、相次いで付き添いのシャマンたちにも同じように感謝した。夜遅くこの第1部が終了した頃、儀礼の本番は翌日日の出前に始まるというオンゴンが指揮者に伝えた知らせが出た。

本番の会場はゲルが立っている場所である。ゲルとそれに隣接して並んで立てられた木々は共に一本の複合体を成している。ゲルの真ん中に、葉がついている枝を残した白樺の木がゲルの天上の穴を貫いて立っている。この木の幹に、人の胸の高さに、小麦粉と羊の毛でできた稈が結び付けられている。ゲルの外で、西の方向に、2本の白樺の木が立てられた。1本はゲルのすぐ傍にある「父の木」と呼ばれ、そこから20〜30メートル離れたところに「母の木」が立っていた。これらの木にも葉がついた稈が残っていた。「母の木」に結び付けられた、牛の生の皮を切って作られた繩が「父の木」の枝を通じて、ゲルの中心の木の巣まで張られ、付けられた。父と母の木の間に張られた綱に、同じく皮で作られた繩（あぶみ）のような物が掛け吊られた。式を担当したシャマンが言うには、儀礼の時に、この綱を通って、オンゴンがやって来るのを、これを「オンゴンの延」と称する。ゲルの東側では柳の丸くの束が狭い間隔で並んで立てられた。これを通って、シャマンに助けてくれるとされている天の9人の童子が会場へ来るという話があるが、B氏の儀礼では、これらの童子は登場しなかったようである。

東の空に太陽の最初の光が現れた時に儀礼の本番が始まった。オンゴンの祭壇が置かれている部屋で短い儀礼を終了させた後、指揮するシャマンと参列者一同が外のゲルの方へ移動した。指揮者のシャマンとシャマン候補者を初め、同行のシャマンたちがゲルに入ったが、一般の参列者は外で待っていた。指揮者のシャマンが太鼓を鳴らしているうちに、候補者は数回ゲルの中心にある木を右回りで回って、突然外へ飛び出した。そこで、弓矢を手渡してもらって、四方に向かって1本づつ矢を放った後、父の
木の元で彼を待ち受ける男たちに持ち上げられて、網からぶら下っている鶴に、馬に乗るのと同じ様に足を入れた。この姿勢で彼は父の木と母の木の距離を1回往復した。父の木へ戻って来てすぐ地面へおろされたところで倒れて、地面の上で転がった。その時、彼の被服を受けていた息子に持ち上げられ、椅子に座らせられて、馬の頭が揺れている2本の棒を渡してもらった。そして、各手で1本づつの棒を持り、それを左右に動かし始めるとすぐにオンヌンは彼の口を通して、話し出した。初めて告げを受けたいと願っていた祈願者が生まれ年で呼び出されて、次から次へオンヌンの前に跪いて、オンヌンが語っている言葉を耳にするもの。シャマはとても疲れた様子を見せて、オンヌンの話しは余り長く続かなかったが、立ち会っていた人々は「すっかり。新しいシャマが満ち出た」と言って喜んだ（Knecht 2010a, 88-91）。

前述したHシャマの娘の場合とは違って、Bシャマの儀礼の場合、オンヌンは、その到来を招くために会場に用意された網の道を利用して、この道の到着点であるシャマの身体に入り、さらにこの身体を告げの詞を待っている祈願者に話し掛ける道に使うようになった。シャマにとっては、自分の身体がオンヌンの道になることは生まれ変わりという意味もある。前輩者はゲルの中で回ったり、木に付いている果を取って、父と母の木の間を「オンヌンの道」で往復したりした行為でシャマに生まれたと見されており、今後、シャマは儀礼を行う度ごとにその身体がオンヌンの使う道になる。これは、シャマではないのに突然オンヌンに襲われた人たちと大きく異なっている事情である。前者はオンヌンの攻撃に対して無力な犠牲者だけであるのに対して、シャマになった人はオンヌンと継続する繋がりを持っているので、そのお陰で原則として必要な時に何時でも道として自分の身体を提供し、オンヌンを招くことができるようになっている。けれども、例外もあり得る。2003年の夏にB女性の成巫儀礼が終わって、参列した人たちが儀礼後の食事の席に着いていた時のことである。酒が回っていて、皆が歌を披露しているところで、泥酔した若い男が新しいシャマを含めて、何人かの客を激しくのしり出した。その時、新しいシャマには突然オンヌンが拝依していて、彼女は悲しみで倒れた。椅子に腰掛けさせられて、今度は若い男に対して厳しい怒りの言葉を発した。彼女の行為はシャマの普通の儀礼行為と同じ形を取っていたが、彼女はその時明らかにオンヌンをコントロールしきれなかった。しかし、彼女のオンヌンは若い男に対して怒ったので、会場の誰も予測しなかったところで突如その怒りをシャマになったばかりの女性の身体を道にして表したと会場の人たちはこのハプニングを理解した。

通常の儀礼の場合、シャマは上記の女性のようにオンヌンの犠牲者はなされないが、彼依によって一時大変激しい場面が起こることがある。儀礼の形には目的によりバリエーションが見られるが、基本的に、普通の儀礼が形の上では成巫儀礼によく似ていて、その縮小した形だけでも言えるかも知れない。つまり、成巫儀礼で示されたように、通常儀礼の時には「神霊の道」は二通りの形で現れる。こういう儀礼を普通ゲルか家の中で、オンヌンの祭壇の前で行う。祭壇の脇で何か木、特に入手しやすい柳を立てる。この木は、オンヌンが巡ってくるとされる「シャマへの道」とも言える「神霊の道」の一つ形態である。これは神霊の道のかなり一部であるが、一部に過ぎない。その先にオンヌンが巡る道の終点である、オンヌンを受け入れようとするシャマンが待っている。儀礼用の服を着せてもらってからシャマンは太鼓を手に持って、歌を唱えながら、小さなステップで踊り始める。落ち着いた形で始まったこの動きは急に激しくなり、シャマンは太鼓を強く打ってからそれを捨てて、飛び上がって地面に倒れる。補佐は急いで地面を駆けように転がっているシャマンを捕まえて椅子に腰掛けさせる。一時苦しく呼吸していたシャマンは次第に落ち着いてきて、今度は太鼓を手に持ち、ヴァリエーションの2本の棒を持ち、語り始める。狂ったように倒れ、地面を回転するというのは、オンヌンがシャマンに入ったとされている。その後の語りはシャマンの語りではなく、シャマンの口を借りているオンヌンの語りである。言い換えれば、オンヌンは人々に対して話しするためにシャマンの身体全体と口を道として使っている。
ヤマンは愚依依されている時に何を話したかを知らないと言っている。オンゴンには、人に話しをするために使える道としてはヤマンの身体しかない。話し終わると、ヤマンは立ち上がり、2冊の冊を支えにして深くお辞儀したり、あるいは荒々しく戸口へ走って、オンゴンを激しい仕草で送り返す。

成巫儀礼で初めて愚依依され、オンゴンの道になることの経験をヤマンは、簡略式でありながら、儀礼を行う度に繰り返す。いずれの場合にも、神聖、つまりオンゴンの道は二通りの形を見せている。一つ目はオンゴンを導入するために用意された繕や木などである。これらの物は「ヤマンへの道」と呼んでもよかろう。けれどももう一つの形、しかもより重要な形では、オンゴンがヤマンの身体の道として利用している。ここで、儀礼の頂点として、ヤマンは身体に神聖を迎え、その語りの場として口を提供することによって神聖が人々に接触できる道の機能を果たす。

最後に観点を少し変えてみると、ヤマンの身体がオンゴンの道である特色がもう一つ別な面で見えてくる。比較的最近の現象のようだが、ヤマンは民間治療師、つまりbariysiのためもありイニシエーション儀礼を営行することがある。この儀礼の必要性を否定するbariysiは少なくないが、Sヤマンの好意で彼女が指揮したこの儀礼を数回観察する機会を得た。儀礼を行う予定の会場に着いたり、そこで用意されていたものがヤマンの成巫儀礼の会場で見た物によく似ていることに驚かされた。 Mushが天上の穴を貫くように真中に白樺が立てられていたが用意されていただけた。この木の幹には、ヤマンの儀礼とよく似ているように小麦粉などで作られた果が結び付けられていた。ゲルの入口から裏側の方へ、2冊ではなく、9冊の白樺の木が数メートルの間隔で一列に立てられていた。列の遠い方の端の木から、他の木の柄を通して、色のついた三本の余が張られ、ゲルの中の木の柄まで延ばされていた。儀礼が始まって間もなくいつもと同様にオンゴンがヤマンに入って、彼女は倒れて激しく回転した。持ち上げられて、椅子に腰掛けてからオンゴンが話し始めた。今回は主にbariysiになる女性はオンゴンの発言の対象であり、大変長く話し掛けられた。その後、夫と家族の何人かも呼ばれられた。オンゴンがヤマンから離れられた後に、ゲルの木の根元に白いシーットが敷かれている。Bariysiは木を背後に顔をゲルの入口に向けて、シーットの上に腰掛けた。肩から上半身を被せるように白い布をかけてもらった。倉の準備が整った時、ヤマンは再び太鼓を打ちながら歌を唱え始めた。そうすると、bariysiはすぐ立ち上がって、走って戸口から外へ飛び出した。そこで、彼女は9冊の白樫の間を縫うような形で木の列の端まで走って、また走って帰ってきた。この走りを数回繰り返してからすっかり疲れて、ゲルの方に立って、太鼓を鳴らしながら彼女を見守っていたヤマンの所へ戻った。これで儀礼が終了した（Knecht 2010a, 91-93）。

でも、オンゴンは木に張られた余を道にして到来したということであった。そして、bariysiの候補者はヤマンの候補者と同様に木の付いている木の元に向けて、そこで外へ飛び出した。外の木に張られた余に登ることもなかったが、代わりに何回も繰り返しその下を走り通った。オンゴンはヤマンの儀礼の時と同様に「ヤマンへの道」を通り、ヤマンの身体を道にしてbariysi候補者に対して話したが、bariysiに入ることはなかった。しかし、bariysiが彼女が外で「オンゴンの道」である余を繰り返し歩き回ったことはこれからオンゴンの保護を受けながら仕事ができることを象徴しているとSヤマンは説明した。つまり、bariysiはヤマンのように身体をオンゴンの道としては提供しない。ヤマンは代わって道になる。しかし、bariysiはオンゴンが使う道に接触することを通してオンゴンの保護を受ける。

以上のように見えてくると、ヤマンのもっとも大事な役割はオンゴン、すなわち神聖が後ろに社会の人々に接触できるように自分の身体を道として提供することである。そういう役割を果たす人がいなければ、オンゴンは突然人を襲うことがあってもその人の身体を道にして祈願者に接することはない。
参考文献

Erdemtu（葉熱達） 2004 「成巫過程」ケネヒト・ペトロ編『中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究』（研究成果報告書）、pp. 81-83. 名古屋市、南山大学人文学部（人類学研究所）。

Knecht, Peter（ケネヒト・ペトロ）2004 「中国東北部のシャーマンについて」ケネヒト・ペトロ編『中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究』（研究成果報告書）、pp. 84-95. 名古屋市、南山大学人文学部（人類学研究所）。

Knecht, Peter 2010a  Initiation rituals of shamans and folk healers in Hulunbeir, Inner Mongolia: Similarities and dissimilarities. Shaman 18, pp. 87-98.

Knecht, Peter 2010b “Wu saman” shi dai de saman, Dimulati Aomaier, Wu man shidai de saman, pp. 19-23. Beijing : Minzu shuban she. （中国語訳）